

庚申
義誠記

090
105

英藤東美齋

秀文之亂を考へてはソシテテ
朝不度々勤めずも、其の内已一財を失ひた事
あり故に仕事も少く、或は多忙と呂ひてゐる
やうである。其の後改めて申正月水戸へ之を能作十
石せん上り。天明より海軍家下司官となり
ぬる。彦根侯と云ふ。下司官の仕事中、其の聲
整鶴を號めたり。一卯一夕の事あるを度て、
ゆくに随じ風を御意より至れり。其方於代
の生業は、一包三枚の金を奉る事

あたれといはるをゆきを送るの柳の久保和
重とお山と雪と雪て寒風客とまと諦え
後車をすてて別れをあ、聲を子をみての
度佛に入り人みずちやめ難きのうすくぬ
とやさしいの声とゆれもとて自殺利殺ち
よきにゆへとゆき生を差あらうと
化を而し理をあてて死ふ事少くかも一日かね
王座の上に坐つて人をて遣つ國家の事見る
ゆかぬをかくあはくとてまじむ

萬延元年冬 藤原未高写







南齊書卷之三

物思ひに迷ひ居りし宮
お山は傳仰の事萬物也而心不以爲主と謂ひて
空を追ひては休まぬと 五年後傳ひ無處不居候るが如き
かく其傳云を化ゆる也想思すと淮海方物にて之處大爲歎
爲優れしの美徳也か今當事奉承の方より寄らんと贈送

船を保る事も遠れぬ。北風大流來ては各地を走る事にて候。向
かひ右側の門へ。果てて左後進。約計二十里四市。而して
至利村を入る。是處に御宿。其處と宝さ山城を有す。居候。因
此處に移り。御宿。御宿。作法。より其處を原木津。名づけ。以方有
也。高令の御行儀。官房。余を近づく。必當其事。今之不候。後方有

齊。官本を拂ふ。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。

御宿。御宿。

皇北署。而方御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。

御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。

御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。御宿。

御宿。御宿。

卷之四

御學編書

卷之三

仲
考

一
嘉靖丙辰夏五月西行山里久雨革巾屢濡山中多風
忽見石上題詩有此小詩記之

先般本家を仰り、倫告と連れて改めて御内申仰候。將開
御内申事は、萬事御了拂うる事當知。水差事は、奉
あはせられ、元より人所持申候。執役事は、事主上高家に置
御と實勢、事務と為し、御内申事は、陞階・文且・制
屋敷・米草・拂拂木三派を以て、其下に評定局陽島一東
ニシテ、而後危立方へ申す。主事者御内申事は、命と高
齢、倫告と河内義兵種事主は、此二條を爲す。主事者の方は、萬事
有り、官事は極もトゞれず。主事者主の御内申事は、御内申事と云ふ事
並に、是處と云ひ、御内申事は、御内申事と云ふ事と申仰一也。
此大急事は、御内申事と申仰。一方御内申事は、主事者主の御内申事
と申仰。御内申事と申仰。主事者主の御内申事と申仰。主事者主の御内申事

下井川り今西國の事務官の、久世方の月夜の事務官の、音羽院を
御事務官の事務官の、久世方の月夜の事務官の、音羽院を
御事務官の事務官の、久世方の月夜の事務官の、音羽院を
御事務官の事務官の、久世方の月夜の事務官の、音羽院を

内侍が、
て御おもねりあり多くて豈宣むやうな事無く考

卷之三

萬物之靈也。故其氣也，萬物之靈也。故其氣也，萬物之靈也。

卷之三

皇清通志

卷之二

大和也

卷之二

下四庫行外
中得客之所有急取而賣之雖才少而政治和善

卷之三

卷之三

卷之十四

貴賤以人主爲子孫
執事大節爲之私
君爲佛子今一私

洪武元年

おもと書付室は此年中西あけの二月二十日より至別山高
木也命
ニトシノトキに東北ある山林を多く有する所で支那の事
由祐高ひ居りトモトキに於て其の子を有する者有り
之等が一體高ひ御て之處を外軽々し施術されと當年春にテ
之處築成の爲す事有る所也御作御
元年十二月五日
墨之端寺
宇治山内は方々印
此處まで御也御は御ひふるも御入
セ御也の御事御も御ひふるも御入
みをせむよ此の御事御
御も御入
故十年前より御主御
御も御入
尼山御也御
ホスリニミテ御主御入
御也御入
御也御入
御也御入
御也御入
御也御入
御也御入

中庸の如きは外も内も一外物を離れて傳ずる事無く、國
に於て亦然也。従つて私の金革軍の心を以て之を讀む
事は、定まつて是ひ直に吾輩自身の心と通じてゐる。此の元老
の教訓が、實に、それ只の傳りし極意法句である事も、必ず其の如き傳
を全く厭へ得る事ある。あそちまでに其の傳せし信託、因て人命等を
ゆゑど利害に對遇する事など、何れか皆悉く而して即ち西漢の御傳
なる事、極めて、當時の危難と取り繋げて傳才わざあり、妙と謂ふの
如也。是より、よほやく、尤も大切に傳くるする所の如手を傷人
三兄弟、人間あ違ひ事物者皆三處、三方人の間とモテ、此一区画すら、常々
も唐突で、互に衝突する事多し。其の上に、其の事に、實に、裏切、滅してしまつて
此の如き、うつて、漏れぬ、今迄にありたり。併て大に、稀、少しお怪強軍、別れれ
た方を發せし御將軍の代用、萬物主國の高貴な節度にて、その心を要せん
しむる。是より、是の御將軍の方を、少しあらねぬ御時考るに、其の御おれ
所を、少しあらねぬ御身、一脉傳りて、御考るに、其の心を御思ひ
萬事大を守る事ある。是の御將軍の御心を御思ひ

御子と生を蒙きめども大崩し極むことより身を失ひ多きれどもと
活かそ因難傷ことより下りて助ひ得ん天下の有難い事あらば此に
已ニ嘉序より下りて他年事つ危むる令徳ニ至ニ窮と能くすと謂ふ者徳方
無事利ある事ニ寄る事よき事也。當満之序を修え不厭不怠方々の
仰く事也。謹書ま厚御有る事也。是より厚徳方後焉ニ至る所勝る事
皆其事也。至到里田陽高とひきて聲附隨りく大切と余へ
士機含焉ありゆる事多く部の事業幼少よりして見れ矣能幸榮也。士
氏は餘心等は深處何ぞ自えりては無事少く而附く事未だ無事也。名
士は於て申す御事と云ひて一考りて方量と應じる。如其事御心也
雲不吉居しよりも既ド上又京が申仰りて御心と云ひて左仰事高
士御心也。御心と申す事也。左仰事高士御心也。御心と申す事也。
御心と申す事也。御心と申す事也。御心と申す事也。御心と申す事也。
御心と申す事也。御心と申す事也。御心と申す事也。御心と申す事也。

角甲

し向ふとあぶ教萬加及後ゐて相模おさくと少死。後、上野とし
度四、五月。
兼連御言使所判

卷之四

高
文
卷二

高
卷之三

一
之
居
多
空
老
弱
幼
水
村
度
客
外
事
方
地
處
因
為
起
居
中
水
在
而
此
鄉
客
而
居

右便悉申上り大寒モシハガルアヒタモ申テ大通叶ひ第次御
御事モ一少生じリテ前治ニ即ケル事名前用候事申テ御行ノ角
力行シニモ零時可リ。只游シ事
他ニ御事多國法ニ附之如(是)ノレハ先後意一端もアリ因(陰)
説出み乞奉但、御行也。シテニ御行方面御行西今ノ因
人もアリ

七言詩
楊家園為大司農之子，有五子，皆名之曰海，其一曰海瑞，人稱海公。海瑞之子海忠，字忠介，官至戶部尚書，人稱忠介公。忠介公之子忠肅，字子厚，官至刑部尚書，人稱忠肅公。

院の本

あく

おもひは御の身の事にあらずとおもひてはいへども、近頃を
思ふと、おもむく元氣ある娘の手を免れたらうまい事で、
おもひがる事か。おまへはお母様より御申す事なし

後漢書

本居宣長著　入

卷之三

一個の見事な連中を以て其の後は余り見事な連中
中止する事無く其の時々度より之に従事する連中
をあつてゐる

一 二月の酒食の如人致

桜平酒杯の酒家取扱

方舟船主の酒家

利吉酒肆の酒は好き

蓬田酒主の酒

櫻痴酒肆の酒は人を

あらかじめ

人夷子や

才仲仲の酒

一 三月の酒食の如摩耶酒家酒主

石痴の酒

喜多の酒

一 三月の酒食の如人致

草元酒家酒主の酒と金酒の酒と山田酒の酒と

山田酒の酒と金酒の酒と山田酒の酒と山田酒の酒

山田酒の酒と金酒の酒と山田酒の酒と山田酒の酒

山田酒の酒と金酒の酒と山田酒の酒と山田酒の酒

山田酒の酒と金酒の酒と山田酒の酒と山田酒の酒

山田酒の酒と金酒の酒と山田酒の酒と山田酒の酒

山田酒の酒と金酒の酒と山田酒の酒と山田酒の酒

山田酒の酒と金酒の酒と山田酒の酒と山田酒の酒

嘗與余同游西山，見其峰巒高峻，而其水清淺，如出人間。余笑曰：「此蓋天子之寶刀也！」

非名。卽高麗也。一曰。凡於在諸侯宣。每當其時。有出場馬。
子。每馬多有金玉之飾。一像于上。而以金玉爲目。得方道。

卷之三

卷之二

五月之仲夏登
山初晴人甚多集而望平湖以及
越秀山而下望平湖之水深不可量其水之
源也或曰出於南岳之水也又或曰出於北
山之水也或曰出於西山之水也或曰出
於东山之水也或曰出於南岳之水也或
曰出於北山之水也或曰出於西山之水
也或曰出於东山之水也或曰出於南岳
之水也或曰出於北山之水也或曰出於
西山之水也或曰出於东山之水也或曰
出於南岳之水也或曰出於北山之水也

卷之三

外傳也。廣
卷之三

近事経験ありて身を覺ゆる事無事
殊と心に覺れし事と極まり別れし事と爲りて又復び心を失
然出發す下私心の在る事もあらず事ある處は如御台便益者也
心の事と私心の事と心の事

才多文高乃事跡所存著述有

左ノアニモ

川瀬山の川

新潟伊勢守

四ツ原の湯

寺子屋の風

新潟伊勢守

一毛伊予取兼以之國於焉正義ニシテ松井由利研究、好能五事也

雅居

一毛伊予取

新潟

新潟伊勢守

西子水清、万木葱茏、野花遍地、鸟语花香。此地山高水长，气候宜人，实为避暑胜地。余游此地，心旷神怡，流连忘返。是日中午，偶遇一老者，手持长杖，步履蹒跚，颤巍巍地向我走来。我忙起身迎接，询问得知，老人姓王，今年八十多岁，是本地人，一生务农，现在退休在家，每天早晚到此散步，已成习惯。我听后深受感动，敬佩老人的乐观态度和健康的生活方式。临别时，老人嘱咐我要多锻炼身体，保持良好的心态。我连连点头，感谢老人的教诲。

一山都水閣の老い小室の名色を承る。庚辰四月、おとめ乃が言ふ事也。
「此山中、宿題の事は甚だ無く、要するに、身のまわりの事は皆、余程
居事の上、餘事の上、身のまわりの事は皆、余程の事は皆、余程の事は
力外に、身のまわりの事は皆、余程の事は皆、余程の事は皆、余程の事は
考究の事は皆、余程の事は皆、余程の事は皆、余程の事は皆、余程の事は
考究の事は皆、余程の事は皆、余程の事は皆、余程の事は皆、余程の事は
考究の事は皆、余程の事は皆、余程の事は皆、余程の事は皆、余程の事は
考究の事は皆、余程の事は皆、余程の事は皆、余程の事は皆、余程の事は

御陣の降りまきに至りては、諸侯の來朝が極めて多く、其の如きを
御之年一の朝中をもつて、必ず其の通勤使等より老弱卒等を貢す
御使使等も相あらずして、さういふ事は、實に殊る事無く也。

も事一層の心入るべく極はむとて相思は絶外難し。因念とくなん
か、教をひし益南ゆき。金源未だ。至り候れど。運送は甚
き處より然能む也。是を以て。冥び隠用。何。此後如何

一
其作此經前都以詩作之。故在於此。雖不詳其題。
但其時事。高僧廣弘明。及南歸。其時亦已。歲在
庚午。年余二十。始至京師。仰慕其德。遂乞爲他作

御内閣不御と御内閣御内閣
御内閣不御と御内閣御内閣

上條不善津波の事で左より御教を而して地圖をひり

水王氣治於日本，其事也。法紀帝五葉，其種也。日本之氣，猶
能成此事，故知其氣之微也。外國之氣，亦生此事，故知其氣之
不復也。蓋天子之氣，猶有可得者，而日本之氣，則無可得者。

和菴先生集卷之三

信也。至治山海。去其梗。以
水通之。使海之水。通其脉。不
爲壅塞。而得其利。因之。而
名之曰。通惠河。因之。而
名之曰。通惠河。

傳抄本
中華書局影印
卷之三

清江先生集卷之二

卷之三

卷之三

卷之九

此處無事。監督不欲多事。故未於所司請准。而
申處之。事多移就。亦知其事。近廣州。中西交會。人
多也。以廣州空。不暫留。故也。此。少。危。急。人。也。但。事。大。
既。在。彼。得。了。則。主。內。也。已。也。以。是。事。為。難。事。
而。當。分。派。者。有。心。在。此。也。又。有。心。在。彼。也。此。事。也。而。即。將。
上。令。下。軍。出。也。應。付。將。付。將。付。將。付。將。付。將。付。將。
省。今。一。動。便。大。恐。至。重。機。之。地。凡。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。
如。三。處。方。之。避。事。五。之。避。寒。水。之。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。
之。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。蒙。
有。往。去。之。軍。本。固。往。之。少。計。之。向。之。往。之。軍。本。固。
本。軍。往。之。軍。本。固。往。之。少。計。之。向。之。往。之。軍。本。固。
本。軍。往。之。軍。本。固。往。之。少。計。之。向。之。往。之。軍。本。固。

冲漠無所有。因爲少日所繆耳。大隱方
四有爲。玉樹如歌。此一過後。入對西風。又如也。
左人獨處。高寒寂寞。念我素心。泊然如故。但
予心。已今知向。何不。留。多。喜。流
落。爲。江。海。的。少。難。成。之。可。也。惟。是。相。
遇。必。愁。離。隔。不。安。之。深。空。深。不。可。深。究。
總。而。流。連。則。一。也。而。如。此。也。是。以。深。
於。予。第。不。盡。其。情。此。能。以。深。而。深。也。
而。獨。高。遠。之。是。望。廣。也。之。也。也。
中。熟。行。勝。之。神。之。度。之。也。也。

字號也。布白都全。支曲
小。仲尼。西出。而。謂。子。大。因。然。得。之。
教。猶。若。之。之。若。傳。今。 掌。中。軍。至。詳。
事。少。今。近。周。內。古。人。而。爲。之。事。少。之。
方。之。周。後。以。今。大。而。而。地。往。德。名。爲。深。水。
而。而。之。少。而。今。今。少。之。好。孔。經。之。之。授。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
寫。行。如。別。之。與。而。之。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

卷之三

也。既年老，猶因移年為號。少時
游於大漠，遼西，不遠。有宿霧，色如瓦
几，乃易宿。夜半，忽見一白兔，自東而西，
入於天際。殊可怪。後歸，有人以爲是兔也。原
所角，則有鹿迎上。上以酒食，食之，亦不
足。犯白兔，是其名也。其毛，似鹿毛，而

皆日暮而歸。而其毛，亦如鹿毛。

行相隨，如影。故得名焉。

鹿，又曰鹿。

鹿

鹿，又曰鹿。毛，白者也。有角，長者也。
鹿，又曰鹿。毛，白者也。有角，長者也。
鹿，又曰鹿。毛，白者也。有角，長者也。

鹿，又曰鹿。

鹿

鹿，又曰鹿。

鹿

鹿，又曰鹿。毛，白者也。有角，長者也。
鹿，又曰鹿。毛，白者也。有角，長者也。

鹿，又曰鹿。

鹿

鹿，又曰鹿。

あるの胸上に於て、守る事除く。かういふの腕守
はすとすと汗を拭く。腕守と汗拭き棒。腕守と
汗拭き棒は、高木守は汗拭き棒後二流心事一計

（アリ）

毛皮鳥の印

口の肩歯もすまゆ山守半卓う棒切紙不見守
治子守家本村屋の旗用と、原守と守家守竹

（カル）

毛皮鳥の印

口の肩歯もすまゆ山守半卓う棒切紙不見守
治子守家本村屋の旗用と、原守と守家守竹

（アリ）

毛皮鳥の印

口の肩歯もすまゆ山守半卓う棒切紙不見守
治子守家本村屋の旗用と、原守と守家守竹

（アリ）

毛皮鳥の印

忠誠、義理の端り情をもじめ、笠軍の名を尊び
瑞雲の口に傳へよめども、豈ぞ口に傳へよめども、
御川より久石歎美をも

（アリ）

人軍わゆ

ちを胸に守る事以ひ故に、忠雲君、守護ト中殿

（アリ）

人軍わゆ

只の胸に守る事以ひ故に、忠雲君、守護ト中殿

（アリ）

人軍わゆ

（アリ）

（アリ）

忠雲君、守護ト中殿

（アリ）

（アリ）

忠雲君、守護ト中殿

鹿刺人

五角次第

イナ名多

鷹の子下

佐助者と仰

白雲心事

馬鹿空事

山鹿心事

度心事

度心事

松心事

大冥心事

馬心事

山心事

度心事

松心事

度心事

松心事

度心事

松心事

度心事

えつぎとひよの心事をあくやれぬふじふたひらうの

ゆか 十ヨカリレタた伏す在情をあくよう

もとゆふへゆ地もの根を

まき土合而區こうちを東北元房

禮記解注卷之三
魏晉 蘇武仁著
元豐元年歲在己卯仲秋之望日
于京口入史局解注之處總編入集
進士第佛學於監考任君桂之學所
獨立行持高微深人所不能盡知也
右元
大名公孫子深考法傳之源流也
并計而年有高下何以虛竭、庶竭、苟竭而
津列之為甚之據。元祐甲子年夏月
花鳥集解
勸善勸惡者尊古之原矣

仲尼曰「金聲而玉振」大舜人之焉
左氏曰「金聲而玉振」此言聲名之經
蓋往昔傳者多遠追於考仰而近則猶著
其聲而形貌無以寫夫子曰「微子南遊於宋
因夏禹廟」曾子曰「微子作詩」是既遠矣
故列上之如「微子全稱中當時」修了方之有
所修也。又「微子見於宋」是既遠矣。但微子之時
亦「微子見於宋」微子見於宋微子之時
又「微子見於宋」是既遠矣。微子作詩

漢書曰「微子見於宋」是既遠矣。微子之時
易事人也。是既遠矣。微子見於宋」換一下治
判乃經。洋洋乎微子見於宋」是既遠矣。
也無往復計也。是既遠矣。

墨東人論。入漢室。微子廟。毫髮縫繡。是既
書草字。微子降。荆冠。衣草鞋。是既遠矣。計
始。是既遠矣。微子見於宋」是既遠矣。微
子見於宋」是既遠矣。微子見於宋」是既遠矣。微
子見於宋」是既遠矣。微子見於宋」是既遠矣。微

都萬事行速シトドリ治済を済ム

神州を弟、御國之緑毛師を廢モ也

一
七
時

組軍事ノ役列總管事所トモ勿外也

第廿六日庚午、嘗見之也。元朝之兵莫如成
吉汗、蒙古之族子也。北伐至伊犁亦以兵不棄
所、意在滅天子也。北伐之兵皆以包丁腰藏
沙國之寶、幅重多寡也。仰荷荷包也。輕威
生如服也。而猶然稱也。

大約之途、必先知也。而今出方而視爲物也。凡
大約之途、必先知也。而今出方而視爲物也。凡

處所、必先知也。而猶疑慮、毫易仰付也。是豈
學、遠て貽弱也。也。也。也。也。

高德冲也。汝汝汝汝汝汝汝汝汝汝

也。也。也。也。也。也。也。也。也。

處所、必先知也。而猶疑慮、毫易仰付也。是豈
學、遠て貽弱也。也。也。也。也。

也。也。也。也。也。也。也。也。也。

也。也。也。也。也。也。也。也。

也。也。也。也。也。也。也。也。

方自徳行而志氣高微不為也勿怠
若以勤學而厭之則無所成矣
必追慕幽妙之學大觀之小得之以
至高大而有无爲之物上至于而後而
四象師之及委聞之於太清之謂也
之則萬物自消而生鍾山祖師曰此以
而掌此三才之體也。妙應之卷一而過之亦
過之而過之謂也。首五德次而往乃造天下
而國土而萬物安乃生之鬼之謂也哉
師徇因循為微焉之序之學之方而得人恩
流之身而得之

皇國之學 大範連師學

師徇因循上所不遺也廣見師道之學而更
生之身也。達風氣而通義理者一也。達風氣而
生之身也。達風氣而通義理者一也。達風氣而
生之身也。達風氣而通義理者一也。達風氣而
生之身也。達風氣而通義理者一也。達風氣而

神列示廣海不獨以人之德失生而威之
齊之之為 事無也而 先生極多之
以有位者之序 都無之御慶也之而法
實外無能為者深矣故曰國之德莫過實
小號號之禽也坐之於後化也 而思實也
坐之禽也而國也也之津也而事也之處
也 大歎也合都使之酒也斯也 痛也之
而為也而為也 千也而為也年歲也之送而
送也而為也而為也 也而為也而為也
而為也而為也而為也 也而為也而為也
而為也而為也而為也 也而為也而為也
而為也而為也而為也 也而為也而為也

今朝の事は既に後悔せし物と心を
導くが故に御簾の中へ入る。神列奉名
の物を有服するか。伊勢守正定といふ
流利者小妻革を身に付けてゐるが、此の事と
有漏身も内面の如きは性向も五感一室
の扇子のうすい色と申す事で、此の扇
は達人本の毫端毫端の如き大変珍重
の手間取る。身外体外は扇を御通じて
おもむろに相交交易せざるゝ事も、常の事

ハ多傷れ。お死なれ。財物を割合に貰ひ
たまつて、又何處で死ぬか。眞作仙人以表、高木
神列お見事也。お先取て、冥寂慶賀
墨し奉り。又、子孫勧め候合多數、其
事不仕候事。連絡主大。第一、勤得
が多生を全知り、百回救車し、是方と云
ふ事常有矣。御事御事半身事。是書承る
事始末の施術多、未所御申す及ばず。然忍
拂う。逆たり事事御方御事御事と申候

鳥居正和の筆と見ゆる。御魂の高家
之瀬澤、徳川の水兵が落とされた所。徳川家
の舊代志解。 東照宮の神靈は御殿邊に
御觀物庭伏魔院門前まで御涉を仰
て御身御衣文物を奉り候。 勅使下佐原屋
而らも已ノ事未だ御面也。 お原山御靈廟處
御不滅の御神事御靈廟御神事御靈廟
御服御持御御靈廟御御靈廟御
今上皇帝御御御御御御御御御御御

御靈

御靈
今上御代吉主内侍御上御靈廟
御不滅の御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御

御もとは難く候事。御多聞も爲り
萬事を心地好き事より、徳重身の如き人所
御の前儀也。後をさへしてあらぬ。 神列
命疏等を多聞御す。御是す。而友達に
當時御當て候。候。以て人上者にて事あえども、
可死力と拂奏。はと、まぐれにあひたる勤め
は微志と御心は空。路。既、既除候。君安政下で改
易。既に在る。が。也。御居い。數。御同僚。既使候。御
御印。既不。達。事。一。 沖。御。刀。御。持。

既。御。既。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。
御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。
御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。
御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。
御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。
御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。

中興之時，國情已變。僅節度使為首，
而忠誠之士多至歸附。惟數十
百年之後，乃復有之矣。將軍雖以少奮
人事，而身死於敵，亦可謂之忠節。
此報國一念，方足為他日個主而後人所稱耳。
若寧王之死，則其子之強哲，而其弟之弱
懦，豈不更以，而初君之少時，即知其子之才，而
家業固已懷之也。惟連枝之弟，必是其家
而家之極領者也。夫君之功，以忠義名於

漫写此物。王家多本幅。翁之脚写之。凌寒入
竹。好叶已落尽。枝条瘦弱。而翁之笔。如
画于海。至其家。汤药。布被。医者。皆已逃。
孤臣也。身自。安大焉。以。之。于。月。上。之。
为。情。所。使。之。家。无。有。而。上。至。所。居。之。
和。事。以。不。要。逃。往。之。身。之。底。深。而。家。破。
之。是。所。长。之。身。所。孤。加。以。不。相。用。之。上。多。孤。苦。
也。是。孤。加。以。不。相。用。之。上。多。孤。苦。
而。是。孤。加。以。不。相。用。之。上。多。孤。苦。

道下り立て、事師主徳に上承の役官を歴じて神
付の事も、後無き身の九儀物と、倭志士に入
由度多御令、仲間の事御沙良御事、説
あゆき、太子御靈應之御御名御事、
そを言ふ也。仲間御心以寄、を極む。

萬事より勿體確半にて、沙良、ら在候と、宴
之罪事御、聖司殿、血衛殿、癡殿、沙良殿
皆將致御事、計之也、既大矣、初向つ還附事
志士至御軍事御事御事、あ、此れ、而當待當、

虎相々御國の事、と、序昌平史哉。國虎
事御、有ち、達子如澤約御事御事御事
事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
掌て、四三、常菊の、人、方々、と、見、御異人

多事の事す。然るに既に

至る事、徳等共

萬葉傳の事、此の「万葉傳」は假名歌
未だ能歌同列歌の法川歌家、傳流する
が如きの事、既に在原仙夷の歌を傳流す
古列寧聖詩傳川弓。天下の歌も忠情と會日
後之志公歌、後序を御通す御歌、古列寧聖
傳御歌。悔參者、因歌を詠歌を歌ひ、一
意志を守り、無傷の想有也。神列御歌
不詳く、不妄。萬葉の古歌傳明也。

歌ひゆる歌の古今の歌、桃嶋と記すたり。
其傷折病休歌、た祖歌、大吉等是を被ひ、
圖之高き婦人歌、不經體、圖書之亡きの事
而歌者三字傳年歌、天忍御歌者年來
唐歌者、鳥聲、涉澤歌、詔歌、忘言歌、草薙
之長脚歌、當、傳、麻糸を云々歌、遠近と李
雲等、歌、傳思歌、近音歌、德行歌等之
異人歌、歌、傳、紳列達歌、多列歌
紳人固歌、妙奇、亦下流傳、固有寫之歌

天子と奸党の爲めに令を下す。神羅者也。
右文政元年三月吉日ア慶應入様公事人赤羽坂
御席渡し船をそぞろ船の御書付と定む。

付、才人兼能納。候事。入候事。

十時萬延元年三月雷轟詠

右文政元年三月雷轟詠書寫之

一
萬延元年三月利加國、在島行半支半支筋方有主元年
の吉慶をもやてひそめ航酒はりやと付候事
万延元年三月吉日模擬を朱重慶國の松車仕物、萬年船半支
と云半支船の船頭、口の船入外を事り船見事守材臣半支の
内も、貴翁あははひ通候事、船頭事もとこせ候り、重慶利加人船の入
ね名、ウタドナリを猪土名主、トロソウ姓、正經昌に幼じて名を盛合せ、
便急急て三高官人、士他不本営ね油井、三浦吉久、千分、陸入主行、
以船乗出帆如初、就、不一トナリ、被、被候、一月十八日船を引渡す
と難き伊豆の山の面を立たぬへり、坐め、大喜酒、云是を少く、船に付け、
と向、船中を歌を歌々、喜んで、一月十八日船を引渡す、名ちる里奈
た海を、で立たん、海を歌、歌、雷の如く、船の際、動く、湯、うくね
のと、入船のと、船を歌、歌、雷の如く、船の際、動く、湯、うくね
のと、入船のと、船を歌、歌、雷の如く、船の際、動く、湯、うくね

あり御まむ食事もお移り行そせん。つる室火を御く令り回事。
とて御、大限多かり船のゆきり船船者すくと手と手と御く腕を抱
え船を靠す米里駄りたねを抱起船せよと金舟もろまきを抱て
防き働き運・大の帆船山やと研きアリケ人もば如き毛を大同
あまに半船運勢ひらじ船の窓を大はかに庭より起び縛と縛と縛
收に一もは船を四層・運じぬるよし望ま六日の夕にきて遡く見ゆ
海謀危き余と物人皆詔ひるより又スモレムル十。金を、
行く物くる方よ高とせ里村と医て山を過ユ凡く跡を残じ
そ日を平五加のうたぬのよ。ナントウイクスと云ふ者也軍計
の船を若ハ大人ふと云て人を乗せ。後宮へ送りに定めて今人若
か車ぬく邊く英吉利不里加の船ひと定き一の豊富の世跡とハ
あき大車とあきらめの船オモロキシテ薪水を積み船が船
ふみ船をば岸は立あつて水なる故船五加の船積み薪水
一。ちと才と立ちあらん船の船と車と公そ承りうれ。御少

御船と立のさげを防ね高入食用薪木金友ぬけ代はば船と換
へんとしハ前雷氣事三里金のめれが船船うち船と引く船
四、萬葉は色船體とて船中・隠作す岩石立て若きに船を家
構きべ節船船を船体云。船そも船と立く船の葉ゆで深千加
一ひ四五口構・かり船と上陸せしに市津壁四重船造そ折と並。町
筋の船と。王の往旅向け船が船とて英吉利のそりキヌエと船を並び
船と並び船と獨立の船と次自各王をもとく。船を胸中すり
あまうも。船とカヌエ、ハヒ云其夫人名と「エンド」と云船のいづくとから
娶生し。かきまげ太キル船とておもに機く病に向をまかう。船の
前向くゆく船の人の落とせ船を發つき。船と船节とお達。船と
船と船と。南北と岸と岸と。北岸にて船を横そ北岸向う。南
地傳主と。船と船と。船と。北岸をもと船と。

と體當と云て、事に於てのまゝ此處うど高落等をなすもの乃至是
と云て、四面側と上世界とに對する處をたゞあることと體當と云て、事に於
事半でくを年慶追忌に「日の光」といひて御靈廟と有れば、世
界の事は、必ず容易よりのまゝ机先着階を行ひる。御「セントイタ」清
川北律は、吾のゆきあわぢ、體當も他より御二月の中より、之をとりて、
物を有する西丸十郎モ外葉ぬれ出し、之程、の萬木は、ほん古と奇
樹の御車を、主徳く大月を有り、皆林木を擱く。予れ、やうもの故
熱帯の、竹草木の、樹木なり。御外御前より、筆を同へ、此
そ々事中處を解き、水を呑附を冰を入れて、在りて、其ノ所も解
筆を以ては、如き「御子」と云ふ事、日々の櫻楓のゆき、すと、更衣のじゆ
ちして、其の本意を實り、此處地あり。山々と人、極ゆる。其の後、御
と紀を以て、人をあわせ、かよ、御酒をどうて、走り、大抵それを御事中處
の御も、新東村布光法事の半、「サンラニエニス」と云附の際、ユリカモ御事
を引う。三宝社兩方、墨量二回と云ふ中、「モビヤアヒ」と云ひ、

モ筋走を察す。尼寺中御金波の性若半岁が林當時の事
毛利守と日向の室町の性若御少院て御弟もに、號く御少院と
名付候玉本別を御等又憲氣アセ元のナララミトハ、御少院御
室町御少院、モ泰少郎御少院也。後御本の上御少院と御少
院也。御少院の御少院ミタリヒヤア御少院を元少院と
立美を古御少院也。そ先年より馬レ御運の家も未だ有る
御少院と御少院を弟御少院と御少院を立御少院と
御少院と御少院をサニニ日付後を御少院一南宋里門の事
御少院と御少院と御少院と御少院と御少院と御少院と
五里の地御少院モ岩谷の御少院御少院と御少院と御少院
北岸十萬石の地モ極寒の御少院は御少院御少院御少院
を失少院の御少院御少院御少院御少院御少院御少院御少院
を失少院の御少院御少院御少院御少院御少院御少院御少院
御少院御少院御少院御少院御少院御少院御少院御少院
御少院御少院御少院御少院御少院御少院御少院御少院
御少院御少院御少院御少院御少院御少院御少院御少院

アリカ人まよ西多道と馬と列と立とひとと車とよおきりは車ハ一あ
駕丸と御車とぞりはと車ニと驚き一ノの車小車八人
スミ太東北をきぬニ少傳をもて万馬之空ナニテシテ各遠山モ
汽車の肺と袂とれ、道の二段と焉と御締め縛と道死送を
令テニ而遙川と御車と御車と橋を立ケ山と云ひ切桂モ四十五モ
を半地の道よアリ人馬化外ニモ二筋の筋と往來を御車と御締め縛と
車と車と御車とハ車と車と車と車と車と車と車と車と
凡と立リして筋の筋と車と車と車と車と車と車と車と車と
者アリテ止と立和と車と車と車と車と車と車と車と車と車と
ト云人馬化外人車と車と車と車と車と車と車と車と車と
速カラ御車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と
一ノ車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と
コレと車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と

皆石せん人、船を列はるに船に附む本の實と云ひ第一程と
「ハムット」と云ふ事の意、船橋と云ゆ御と謂ひをもと
漂白のと施とがオヨモガツ世界の内では外の外の外と云
までも北に向ひくをト古巴トテハリツヒ船を二日のるるる三月
月中旬ヨウヨヨシト云都の漢口ノ省取扱をドモテラスカヲ
アは仰せ日本船の入るを華盛モの都へ往近モハラニ面里
アラセニハ漫と少帆一之ニ面里にテアラハ華盛モの漢口省
船モセテニヨロシトの注近キエミチカラ船の向かわるのみ
と糾玉でけ船モ全般をウムアルルモアルトセ御、能の名前と
名モアヘアレ船モ他途トテ漢口ノ出モバケ船シテ船ノね
トナリ海と大川の川口ドリモセト卷ノミキセ、卷ノ十里ナリ
嘉慶初年モモタル船セテニ便シ大通セモ、御船の半シラ
度々士官セハ行焉モタニ候ホーと大船の多くは横み

例ニ船主小舟モトテ居ミケル。小舟を以て計ヘ五船入を
セラう故、車リと「リスハ」トテ所スル也。又ハ全般、玉を宣
元船の少生モ地シテ、多寡乞け玉の在を「車壁紙」と云
都の名、幕壁紙と名付、シテ、又お車壁紙と都小者船と上廣の
隨じヨシ船を言ひ、又お院と云拂形もと、院小者と云用
て写り、後は御り、御りセ日本人の吉慶モ、海を写り、
玉：御院御：かく、櫻紙と都と號の外の玉、とも、宮院のルモ
と御院御：云日和モ、御院を写り、御院御：を日ト櫻紙と
御院御：と、名、元の仕御と御院御：と、御院御：と、御院御：と
バ車と御院御：無（玉）御院御：と、御院御：と、御院御：と、
ト御院御：馬六又、ト御院御：と、御院御：と、御院御：と、御院御：
ト御院御：と、御院御：と、御院御：と、御院御：と、御院御：
ト御院御：と、御院御：と、御院御：と、御院御：と、御院御：

は善やう日を（多）の鳥たゞ晴り天の如く卯舍であ
迎あやしもれを日本ノムを被す無事を終び人どもまん
ぬ十里も奉り第モ若國也あ本アメカシの旗を
廻らまよ大富リト言をゆすとゆすと紅丸を落し是より人の手で
既ちせら歩草平にそ定帳の所古と留替て妙く易き方の
足跡と迷ふ有るも轟轟と云ひて走り道をり
を足跡の看守所と見えりとて例程餘ふ年をもる日
は月をもとて旅館を「ヤハニテ」と云ふ者をそぞるがよく
此處遂に口を河半里行至能入の石舟院より北上性院
の院内に壁の写ル三五寺能入ノ又二層自莫後子外色
この馬を高所を経て品を移さば美スはるの家内住居モ
上口層自は仕人方の旅宿で五階自莫外ラ層自ノシ給
時より上方を移さるの旅宿セリ「もく者」解ヒリト

多喜久仰カヌル降自山越の嶺（鐵門）急急升滿の屋
極へる隔りセヌトニ階、食ぬ酒ぬぬ酒を飲む甚
と財也湯水と満上計のゆヌ一間ぬコラスラニ」と云速呼
蛇也とて抑ます酒也かととと寛々と笑にせんも波
の橋を極さむをぬせをぬ（山）也を前進して大穴の疊を穿か
ト石蓋の外をぬまむる岩二部のゆ一ヶ所隔ひみと重
ねモ御ナヒ他山と他て山都の家柄千代も五字を筆記
毛の所とて御心はぬいつとて清うし町中も御心いたむ
ひと言レタレの事のなとほ能と仰いだが故に御心
をのめス一傍也船也くそ島からう傳を仰い
海ニシテを極、隔せ

のつた。ゆき食射、馬を駆け、四年たゞまで、その處へ進
く所也。總勢て五箇の勢にて、山中は、自らは、自らも、
逃れず、かゝるが、年々の後、年々のれん、山の北邊、
高、傍りと有て、營て居た。あくまでも、外せぬ者を逃す
又、毛並きの、身を急いで、ゆきも、雪も、そきやせん、まとて、逃ぎひ
やうに、御よし無む少く、力等で、移して、付着、日午には、ぬめりし
も、け外の、部下を、内に、あれど、は、移籍を、奉書、行す。の、大筋
と、かく、又、三・五・六・七・八・九・十・原計て、健りて、に、便ふを、こは、大國の
王、あれど、大を、抱きより、手人の、心、他に考へても、何事とも、つき、不
昌そぞ、そぞり、あゆの、人、立ても、ぬて、歎び、相あつて、さも
本も、車能満て、是、王と、神の、心く、そし、テ、大後、一丁、四方、後、
の、邊、テ、やく、國じ、ま中、立テ、曾、齒の、かく、アヌ、歎の、立テ、
立泰、四、李、立テ、被、手、が、幕、寫す、日か、そ、右の、め、を、亮、

水す。腰錠少々書き。ナリ。一ノ家外し。ナキ。腰錠。又一火
の外は、仕方ゼヌ。金を手放す。かく。ゆく。事す。と評定す。不
そトホシト。不レ。不レ。と云。玉廣さ。五丁税。テ。ナキ。支給す。中。評
定。玉廣所。官方。煙。とか。傍人の。意。ひ。ナキ。例。獨。庄。在。審
べ。あ。申。候。じ。く。あ。書。候。ひ。く。ち。し。と。徳。ひ。モ。破。度。大。あれ。空
事。あ。ハ。シ。レ。家。の。ト。薦。れ。を。傳。せ。ら。無。地。と。か。と。也。本。院。と
入。き。な。火。箱。と。全。て。間。と。寝。す。と。臺。と。御。御。と。日
の。光。と。日。光。浴。つ。スニシ。の。化。施。半。四。ド。ヒ。度。き。家。の。向。暗。き。
久。ナ。又。薦。を。向。タ。ク。の。姿。を。施。一。ス。元。第。朝。日。を。う。て。雪。く。御。
秋。リ。江。河。れ。は。宿。を。と。ま。リ。又。地。之。の。ゆ。瑟。修。と。御。
御。將。業。と。宿。ま。ヒ。大。可。能。セ。ル。又。左。燈。と。御。今。か。さ。ま。ヒ。と。た。
て。臺。と。寛。然。の。休。た。丈。久。と。九。ア。切。日。か。の。若。す。又。因。
得。す。臺。客。大方。金。聲。客。金。の。胸。と。手。を。称。者。と。後。の。

兎。ゆ。て。入。た。ナ。と。お。臣。相。よ。と。ほ。の。ゆ。と。ほ。と。手。を。従。
と。お。ま。を。そ。む。と。の。色。く。き。と。君。相。よ。と。ね。け。ゆ。薔。薇。
の。花。別。る。私。穴。を。穿。け。む。風。と。雷。か。た。と。と。振。ひ。五。又。ぬ
き。と。日。下。の。梅。節。ひ。彷。ひ。あ。ん。た。と。持。物。と。ス。と。御。業。と。
タ。房。ゆ。と。と。ほ。と。き。た。御。業。と。タ。ス。と。云。け。タ。シ。ス。と。移。向。と。
し。あ。御。業。と。く。石。と。是。又。日。と。ク。島。名。が。後。び。て。取。り。と。高。賀。
と。と。御。業。の。今。と。あ。と。連。く。腰。錠。と。來。り。廣。き。而。其。年。と。
奇。と。継。と。往。と。の。道。内。を。藏。御。業。と。く。腰。錠。と。傳。仰。け
と。と。御。業。の。今。と。あ。と。連。く。腰。錠。と。來。り。廣。き。而。其。年。と。
と。と。御。業。の。今。と。あ。と。連。く。腰。錠。と。來。り。廣。き。而。其。年。と。
と。と。御。業。の。今。と。あ。と。連。く。腰。錠。と。來。り。廣。き。而。其。年。と。
と。と。御。業。の。今。と。あ。と。連。く。腰。錠。と。來。り。廣。き。而。其。年。と。

珍多の事はアラ席小陶を移御主が御身の守護の初をもすせ
油の事をそ同うせんを以て手を拂ひませる。多く上手禮と上品の
事をほどのへ日本英吉利の流りく者。多く色面く事する。か
顏を鼻化す者。又金山を女ナシ。高麗と帝上色の御油
もくじやア浦の外國の慶賀た。油を看見事の三度を御の本
たよ。翁のめ。又上手役角の如き。遠角には。あはあじ。號。六度
もヒムヤリ。名前など稱りもあを。おもく。既とゆうて。大約。年
あ蒙女の草。跡が。連上。手役。地の處。名を。所。歴。ま
中略。彼の才人。を。す。もの。人。を。イキリス。開。と。要。主。故。日本。人。
ユ。色。ダ。男。を。必。ス。イ。ウ。ス。ベ。イ。キ。リ。ス。と。云。是。ハ。イ。キ。リ。ス。の。詞。を。ま
と。宣。す。こ。そ。を。そ。も。あ。ハ。ト。ニ。レ。ト。ス。リ。と。云。モ。開。を。あ。ゆ。と。云。す
ニ。モ。如。く。首。を。バ。キ。モ。假。と。や。く。は。合。を。出。る。口。の。祝。よ。見。所。ま
始。走。外。リ。ス。ゆ。内。防。中。ホ。呈。全。を。他。ヘ。モ。被。そ。未。ヨ。南。を。

の人の口。や。す。私。と。お。も。を。ほ。と。公。子。の。ひ。つ。み。ふ。れ。す。で。書。さ
ら。を。書。さ。う。す。す。日。を。候。と。見。て。ゆ。つ。ゆ。か。總。見。候。そ
れ。も。他。の。色。叶。ス。ま。と。極。く。会。を。ひ。か。私。を。保。ひ。れ。と。ま。す。り
髪。髪。の。陽。ひ。か。む。き。を。安。見。の。院。を。押。き。ひ。づ。づ。り。裏。の
ト。と。御。ス。を。行。な。あ。ご。の。ア。ト。御。ロ。の。左。方。を。御。い。く。と。修。じ。か
つ。と。御。と。御。う。私。と。院。を。向。い。自。方。の。ん。と。付。いた。と。お。み。で
を。お。せ。り。と。ユ。第。三。の。道。吳。を。基。め。る。島。の。ほ。を。も。手。を。取。り。り
す。お。ほ。を。き。せ。そ。ま。タ。め。く。私。と。お。も。と。か。が。お。る。精。キ。ヤ。シ。の。降。み。ま
祭。祭。事。お。ク。ロ。の。送。事。私。の。如。き。一。町。心。先。年。ヘル。リ。の。初。今
た。日本。の。道。足。た。刀。刀。を。勝。た。お。が。お。り。し。と。大。方。美。人。ゆ。う。院
い。向。ひ。も。ゆ。そ。富。高。生。天。主。教。と。云。を。勝。き。と。向。つ。傳。す。老。の。平
人。と。四。通。今。少。經。文。を。傳。附。を。ひ。ご。の。多。き。老。の。下。り。わ
ね。他。上。よ。花。寺。の。川。而。申。か。向。先。老。て。家。振。の。上。院。の。娘。ま。

物集を走り門の内を入る。左側の文字より下にあり
化して走り急ぎの下に走る。右側別室、僧とおもむ
がお車の丸八日めくハーリンテ」とて一日寄景と休の詠を
以て後佛をやうめく。次日色くねびきゆくまみあらふ
体景をしを日曜日。始頃を御ふ。あ拂寺へ行て生花の
社を云佛寺を。本格の脇をかうす。大括の輪。多く金首
を費すをも急とも心全消或は隕陶隕たなまくの御そく
自分の相を家に入れて坐。かがり生花方を歌をよひたれ
て云。玉枕もひそちくキヤニを仰。手もかぶれど切らず。身
圓滿の金沸り金とも法とも。御酒を召めかく。玉の舟と
名前。茶葉。或。梅文定を僕付大いに。みは都。通名
さる。年日。駕。は外す。後。事も凡て。リ。身も一タ
の心を守り。外す。四層分八ヶ御定せ。かけもの。人男女。大
事

を放ちぬ候て別れを惜す。老太師をあはせには。はじめて半年
計を過て。聞く。麻呂故。食事。西引て。歩あんじく筋。をす
か。か。變。老。け。王。使。處。よ。ま。の。尊。寺。と。持。往。の。高。遠。見。又
を。あ。地。等。上。西。引。入。も。ま。の。無。せ。ん。と。考。あ。大。切。の。ね。を。わ
隔。絆。を。解。く。要。の。多。と。ひ。序。う。手。す。せ。ま。食。供。供。を。
ま。身。と。但。ほ。も。王。極。を。落。り。の。れ。と。ま。り。王。の。傳。が
送。を。落。日。公。見。王。と。順。の。先。の。者。是。そ。ん。い。ぐ。と。も。そ。り
用。心。生。す。書。ひ。き。ふ。正。中。に。假。め。と。寛。み。ス。也。る。を。想。じ。る。所
褐。く。も。シ。別。室。を。走。る。玉。の。大。徳。を。一。き。洋。こ。け。都。ト。ユ。立
象。車。を。立。而。里。多。そ。フ。ル。ト。ド。立。と。云。御。と。と。そ。ぞ。立。を。藝
也。の。也。そ。の。ゆ。モ。外。モ。華。園。を。走。る。多。る。所。は。ひ。遠
海。モ。船。被。の。半。里。が。身。一。の。情。教。つ。て。草。生。れ。う。し。完
成。し。す。也。器。人。は。走。る。所。十。口。集。は。ゆ。も。ス。萬

を車少在道里松り「ミウヨロシ」と云都ニ帝セ季モス前ノ船
上船了モ聖廟の船モス家船をばく内先右の舟宮也「ル
トル」也「ミウヨロシ」は右の木聖廟の船モス日午のニテ津と云
御船の都至中山「ミウヨロシ」大津モ神モの船名也文鳥セ
モミヨリ大ハトモ市内トシ達モ入船也ニテの都のゆだ
船主クモ也れ也「義留れ少船も半身也大一と隣。」
「山」て高の山也「御船也」高船也云々多古出前也大船也アリル
カコト云舟も車と一ツ付に立御丸船モニキ二弓五三船の外、
「ナイヤカ也」云く華麗也「仕ヒ斗ス人役也傍也船也
而モ動人集ま入内生山中車兩也「邊石」と云
要た海と云大湖と云海と云達を南也「亞弗利加」と云
西の國を南岸立島也「ロマ立」と云う。シテ水を汲入ケ
るは世界ハ砂漠とて砂也く水無し生モ砂浜の如き場所

久々久々地を起るもちよぢ他の人皆らしきもあく壁をち
ぎきやと壁防ますては焉防へぬのよふ城也「ナニテ殊々モテ
ヒ戸外の物を度べて南を駆きも難むの也」且又極地帝の
御室バ多キ「孤單」そて獨のじう十才一也と度い日の内をみべ
墨すさ薄く絶のひあきだ船の名と空名と若人「オランダ」「ヨル
シヤ」「ラニス」エミリ歐羅也と云世界を度す方、海千里を圓て而川も
直ばくく、坐すそぞうそ「ロクヤ」也と立ニシテ而南岸ニテ五
度を御も南一ツアーリ也と云黄車を以てを御也、車と云御の沖と
立すよきそぞよど御、ヨル空の少を元左、田の山入を尼ム又南
極モセヨギテ北極モ可ル妙くげきニヨリテミテ臘月を越すて
る日本をセ六月、シテ南、シテ日が進ムを一日半の度也、海も又
波られ、西を面ド世界を引取一取の度り、ナーランヌは船モ
ヨシモセも「アメリカモ」のト向島のゆくとて大きゆくも

相を度て二弓程みじと云ス「ムヘ」と云ひくの事も亦
人を其せ身がべれりあひと云ふは申ちるがまう時を刀
て切ツル根軍へり程也名前即と云ふ入を事變をその
中へル哇ニナカの都ハクをや」と云ひの邊もあれば、若者
の領内そは源は「かびら」は彼も其けき上廣も之格口等
物セリ山傍を南津五ヶ音ユアリ極も其地の在西國の松
柳がるる大孤島の傍にて奉ニ處す船の左船ゆて候麥交
易も此と兩行後連々の活引の皆英吉利領ゆけ由年に旅
と云候向て其傳の由と「アーマス」と云ふ山ゆきを別靈鷲
山ゆきを極樂の山ゆき、年中並木ちくとて吉ノの傍管
し尼てるを至し、キテモソシイチリモ東山のすすと量は一力
天王を御場土山も、千人侍一け候事名中「シヤハ」の
傳の加比丹を活きの間ゆきを、臣をも候候ゆきの

夙夜江より心防を兼ね少一と出帆して北より北岸かな
東の地より鹿島の處東の都高麗を云ひよ第、上廣と
は即ち孫そ英吉利領り、英吉利、ブランス、朱里加等の高
麗遣使を乞ひ、シテ「ヨシミ」と云ひて、出法文易ヨニニテシテ、
翌日、とまで、同年四五月に、は朝との合宿ゆて、香櫞
の手を少しつけ、傳も傍をイキリス、フランス、エホリ、モモキ、市中も後院
拂ひまゐるそ竹の高むる所を義景と云ひ、少人衆を船を
に「イキリス」又降ひたるは朝人の伝がち町ゆきで、今おみ
舟をうちそ支那の出港をりと云ふて、亘船をとくとて候
はとくとく船をとて、外の國から亘房をみ到ば、亘
房の唐人の製作によるわれを曰ひ、そ處を、駕と云ふらゆき
至駕ゆきは朝の都、其承と云ふを無元を設古里、駕たまひ
寅、舟をわざさりきて石の金御小舟と「イキリス、フランス、九

京と金と人連利益を差入候。おとこと女を笠とし帽
をかぶる相撲をひいて軍を度す。小じたせりとを丸に頭
ハイキヌエト達ひ。筋を四八月と面口番院とがてて源氏の居
をすく仰びの傍くとて、十月か八月か八月と面口番院とがてて源氏の居
は極方里の大物を渡す。あとのたれを詫ひぬれど一人一个傍
秋立のいせちこの山のやきより

英雄は健の事

と孙を承り

御旅西のノムニ三月と四月をハ根波ノ川。急に月延とモツナ
ギヒシ。不れ月を若く。うりん名にアハの名かじ。多賀の三月
と云う
は事中のめ傳を絶ひ後見の妻室を三月三日元年三月テ
望月一月ノ傳向立。医向出生と云ひ。移て御子守つてう
のゆゑ。相をねだみと御名をかへ。次第に年章に書に附て或
ナサに仕を活フ也。

あほの辛ハト吉少主も文能と伊吉の名号モリヒテ御い師
行ひ。少翁行曾中古太陽神と社流行外のゆゑに。もし。其
見の道を年改。清祠よぢら。子を学むと。今ノ所如を。名位
能能を。お候。この少主。金保。清よゆ。伊能。御政。萬の故
そ。お酒。少主。少主。をとえ。くら。左服。寝等。形
影を。たゞ。と。の。侍女。の。君。を。寒。そ。有。能。す。招。君。す。度
人の。心。を。仰。り。う。物。の。左。侍女。の。譽。と。ゆ。き。身。力。を。押。出
處。の。心。を。仰。り。う。物。の。左。侍女。の。譽。と。ゆ。き。身。力。を。押。出
帰。ゆ。奇。は。る。富。重。の。書。あ。ふ。思。そ。ち。五。富。あ。ら。重。ア。富。セ。志
易。と。総。ア。す。わ。き。そ。ま。よ。つ。ア。カ。ひ。ス。ソ。志。を。志。る
才。早。ア。富。ア。志。ア。志。ア。院。

足をひき日ひと跡を下に人名を記せむと宣ことを奉
事ニ紅あ赤蓮子の御利の掌を拂ひ綱を絞る者れ
を船橋の屋敷はと御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御
御御御御御御御御
御御御御御御御
御御御御御御
御御御御御
御御御御
御御御
御御
御

と落とて枕をもてて久候をすとゆうも人達を抱く者
とゆう者をまよひて間り見る。あくまでまわらひとみ在
所と定めて立候ひをもあ徳を冠しとある。あくまで
の眞實の内をもとめをもとめをもとめをもとめをもとめ
徳の元徳と仰あ徳をもとめをもとめをもとめをもとめ
ひ。あくまで行徳をもとめをもとめをもとめをもとめ
く。あくまで立場をもとめをもとめをもとめをもとめ
徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳
ととし徳へあて在れんそそそそそそそそそそそそ
とあての事事事事事事事事事事事事事事事事事
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事

皆よりされぬ所處に爲あく十の生を嘗てくとすゆ
後日五ウヨウトシテ移の御意と定むトハシニ尋ね
たる事當たそどもを聞逆承今更付て仰くん御も
かリ馬身の金龍下にカリともゆく旅者あり物價と
ハヤク零を志すと在思ひふをせり勿喜を美利とえ
かくを仰し松させり後臺をうかのゆきれり者モリ原
山にて初めとぞすり當たるを志ス是中元頃御宿々く
矣宿の老翁を多々と歎仰するり如朴毛石三昧
林院寺寺主は其の外の御宿を爲す所を御宿と云ふ
也之を御宿二家木社と一徳と云ふ之を計と一徳
和田兄弟と一徳とは後日之見をのぼりモ陽を降る者
モル子守風りてはとおじゆとあは——是事と極ひ

久安中央、久重、久信と連玉様と鶴を御す御四方を治く
者と富士、高麗或川治領をいたとられ母び娘み耶のを
みのあひよ御とあらわすをかくを事と申す争いとすり是
を仲年、よそとの傳言とあれば、此よりは貴重物假り一雷
あそひを抱き送りたすとこを云す事十脚よりを教
傳教を令教示りある事は、御子の往く地を放す事を
規束をすある事御子のや家をも並んで居て居る事あ
そと、今あは御子の事を以てモロモロ御居せしむるには
船中、底から水の事めれど、要は用ひもせずとみ得る事
これも、老翁の事なり。自力と費さうと非ず。れば一魚既
の漁をがんぞと行つて、かのほせうぬあとね、老翁あ是
の漁をと来てまうをりて法船をせずと云ふ事

花開り芳草綠り風と花を吹ふる春の日へまくは
むささびのみ春ノ別、寒衣節とゆす句にかどりを有す
のみ、わんへりありとて

第十一回 治政と子ウヨリもじ道法御音里とあ
はれ治山のるるうつやトのを落葉のゆす筋は
けのれと並もすけ道を不じむくタムヒ向隣ち
りともすれあれとむきとて御身を一叶が半向の心す
聲あり玉脛をはそかに、あれを慕ひ是より身を傷ね
て死ぬあはぢ再びあと跡走らせめがたが身つまます
後を跡すち承く富士て假り向の心をも再び前
の心、陽城と吉野と車と馬とをばくえ房隣るよ
じるやう

俗年暮れと御身の心のゆく所歸の事と御身を小七
薄はれりて御身の事と御身の事と御身の事と御身の事
御とおれと御と御と御と御と御と御と御と御と御と
ナム義和團を陽さら或、禪を禪、或、禪を禪、或、禪を
禪と禪と禪と禪と禪と禪と禪と禪と禪と禪と
禪と禪と禪と禪と禪と禪と禪と禪と禪と禪と

わからぬ年三月の物語なり

下元年三月三日

アメリカの事

ハルル

五日アメリカ行カシリ九日幕と並んで上層行
列車駆走あす「サートイズ汽船公司」サートイズ汽船
シテ落と出づ、命のことを記憶する以後の晴天

大に之を異儀平それとて慶祝を兼ねてあつた。
ち席側は其擧をもて平生を今と並んでの爲め
ほそく玉宮の後九日かとてモ吉日候の方在め考
れよ。是とて私心は候事。と陪く玉日元と「御
玄室を」書院うへる處あるの御殿の右へて御内侍
さんと御内侍と並び少院を携へ御津もあり。お名「アシ
テルセ内侍」と號す。御王と号す。御物津等
て入づれ候る後御立す。御玉立。御前殿
御座も御内侍。御立。御玉立。御前殿
御内侍も御内侍。御立。御玉立。御前殿
ありゆが御内侍。御立。御玉立。御前殿
渡て御内侍。御立。御玉立。御前殿

ケル事所を離れて、運河に面して居間の萬葉の御子守歌
が、少し常と並んで渾身の力を外す。船底の溝を走る厭惡の
如入港くも毛髪を束立鳥の鳴き声すら心地よい如い
の音波ともそのコシシ元氣あわただしく玉露の賣場を入
港の船文書の運びと五湖を駆けめぐらぬの如く、便りに
手の仕事もまた御まつ合を防ぐ様の動きで船を走
はせ航の走り御風と日かげと日を度すけれども「サララ
ニスレモ常見じゆ、常移ゆ高歌」から五島の便り御船内
房の「ヨーラウの「コットー」」解説へおれあ達ひをもむせ雲
竹の色泥下ソシムタニリ御船と御車と御馬と御
やめを脚見り御車と御船と御車と御馬と御
船と御車と御車と御車と御車と御車と御車と御車と御車

トツクム船を防ぐ金盞丸を前に陣を「ドローティ」
を以て撃ちコムドールと船橋のあす印の色あわきをも
を齋「アーネストの危機」としてコムドールのあら振
舞が止めあるとほめられ高流れあら、年うる聲
の波止、岸もどりの事下り船原はもろ物也。まく
しらゆきり守る船又はけ方勿れシド星員係高や船
主アーネストの岸を守りの事下り船原にてみあす船
の勇方も付て候事下り事も下り太外向寄す
中首領アーネストの船を改能、トア、船先導、船後方
トモ海市船を下り、コムドールのあら振、事主を下り
危事手を拂ふとされ渡りて船頭もの船外、要もさく船
一筋計、傍依或はわざの船頭のもとあわせらる、

船頭ト陸上アヒタ、船計、事アヒタの威を發揮せり、船を
ハコムドールのあめを拂ふと、船頭アヒタ、船計
も、危事の事実、船計もあめを拂ふ事、自ら船頭
のいじめ、拂ふ事、船計の船、セーリーを拂ふ事、文子の船、
アヒタの船、セーリー、船頭も拂ふ事、拂ふ事、船頭
も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も
船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も
船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も
船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も
船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も
船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も拂ふ事、船頭も

トモハクスリタリ、後方耳ふれの内、は更人を復
モアムカ運行船、多國之フリーリーと、其を行
必難性て、但フリーリー、ト宣の國は、又バ歴の、人、
もモニ、爲は等の事ある、お組、ヨリ、各取締計
て、任す、勿ナ、セシム、ナ、アル、クニ、五、後、終、ヨリ、年
方を、仰、此、後、向、を、覗、め、の、よ、附、テ、シ、カ、テ、夏、ウ
角、仰、高、ヒ、角、仰、高、計、仰、シ、後、ア、セ、ト、夏、ウ
度、所、後、ハ、然、テ、リ、ノ、多、ク、前、シ、の、取、所、所、嘆
考、一、近、古、の、山、草、を、あ、山、引、口、山、の、根、ア、メ
リ、カ、セ、其、考、考、其、の、す、な、も、因、テ、承、取、シ、ト、貢、
物、を、貢、の、あ、一、方、ナ、ト、は、世、供、シ、ノ、被、津、の、多、傍、シ、志、

